

# 「醜い日本人」現在に通用 なぜ沖縄は「祖国」選んだ

## 知念 ウシ



ちにん・うしい 1966年那覇市生まれ。むぬかちやー（ライター）。著書に「ウシがゆく」など。

今回、「沖縄の日本復帰40年」を踏まえて先生にお手紙を書くにあたり、私が大学1年の時に読んだはずの先生のご著書「醜い日本人―日本の沖縄意識」を岩波現代文庫で読み返してみました。実は、失礼を承知で告白しますと、書名は覚えていましたが、内容を記憶していませんでした。理由を考えてみるに、当時の私には「いくら批判しても大人はどうせ日本をやめないんでしょ」という子と

もの頃からの気持ちがありました。また、「これは私が生まれる前のことだから、今はちがうとか」「復帰したのだからよくなっているはずだし、そうでないなら、これからよくなるだろう」という「復帰進歩主義史観」(私の造語です)もあり、それらで思考停止していたからではないかと思えます。今回拝読して驚きました。1968年出版のこの本は今もまったく通用します。40年以上たつてい

るのに、この本で先生が激しく批判する日本の政府、ジャーナリズム、知識人、文化人、そして一般国民のあり方は変わっていません。すなわち、依然として、「本土の人たちは、沖縄の犠牲のうえに繁栄を謳歌してきたが」「本土側で沖縄の問題が『自分の問題』としてとらえられていない」からです。さらに先生は「はたしてこれが沖縄の人びとが好んで使う『祖国復帰』の名に値するものか、疑わざるをえない」とお書きです。

それなのに、なぜ、当時の人たちはそんな日本に「復帰」することを選んだのでしょうか。すみません、当時の複雑で込み入った状況、苦しみも知らず、簡単に聞くな、とお思いかも知れません。それでも、教えていただきたいのです。

「日本に戻る」という発想は、戦前の大日本帝国沖縄県時代がいろいろで懐かしかったのでしょうか。

戦前の日本人にされたまま、敗

戦を迎え、そのまま、「日本人だから日本に戻るのは当然」と思ったのでしょうか。

だとしたら、「醜い日本人」という本は沖縄の人の自己批判の本になっているはずですが。しかし当時の沖縄の人も、そして今も、これは「かれら」のことであり、自分たちは「かれらの犠牲になっていく立場」の人々だという意味がわかったし、わかるのではないかと思います。

米軍に占領され「沖縄屈辱の日」と呼ばれるサンフランシスコ講和条約で日本に捨てられて、沖縄では非常に怒っていたはずですが、それでも日本になりたい、というのは何だったのでしょうか。「日本」というのは、現実の日本ではなく、何か別の、自分たちの上位概念、理念型、理想郷みたいなイメージだったのでしょうか。

復帰を訴える文書などに、「民族」という言葉が出てきますが、何民族のことかがわかりません。当時人々は、そして現在、先生は「ワッター、日本民族ヤンドー」と思いますか。

人権が踏みにじられる米軍占領支配から脱したい、人権を取り戻したい、という思いが、なぜ「日本になる、戻る」になったのでしょうか。文明や主権国家体制というのは、ヤマトウから来る、という感覚があったのでしょうか。

# 化

## 復帰前後

### つなぐ言葉

知念ウシ ↔ 大田昌秀 (上)